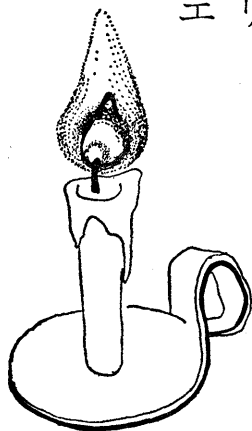


## エリクソンと幼児教育 (3)



仁科 弥生

### (一) 筋肉と肛門期 (その一)

前回取りあげたエリクソンによる八つの発達段階の第一段階につづいて、「筋肉と肛門期」と呼ばれるその第二段階に話を進めよう。それはおおよそ二歳から三歳の終りごろにあたり、子どもの筋肉が急速に発達し、言語や識別力が増大する時期である。この段階における身体器官の様式の特徴は、筋肉組織の発達に伴って、前の段階の「つかむこと」によってものを専有する様式に、自発的に「手放す」「落とす」「投げる」などの様式が加わることである。このことは「保持」と「排出」とを交互に意のままに行なう能力が増大したことを意味する。そしてとくに肛門部の括約筋の働きは、排泄のしつけを重要とみなす文化的環境においては、厄介な問題を引き起こすことになる。なぜなら、肛門部位は二つの相反する接近の様式である保持と排出とを交互に行なう部位であり、子どもの相矛盾する衝動に対する頑固な執着を表現するのに他のどの身体部位よりも適しているからである。しかしながら、括約筋は硬直と弛緩、屈曲と伸張という一般の二元性をもつ筋肉組織の一部分にすぎない。筋肉組織全般の発達は、子どもに手を伸ばし、握る、投げる、押しつける、ものを専有する、

或は遠ざけるなどの活動を可能にする。このことは子どもにも環境を支配する力を与えることになる。と同時に子ども自身もそれを欲するようになり、自律のための戦いを始めるのである。たとえば、この段階の子どもは、いかにも愛情をこめて大人に寄り添ってきたかと思うと、突然邪険に相手を押しつけようとする。ものため込むかと思うと、それらを惜しげもなく捨ててしまう。一見矛盾するようなこれらの行動は、実は「保持」と「排出」の様式の自律的表現に他ならないのである。

そこで、エリクソンは、この時期に発達する新しい社会的行動様式は「手放す」と「つかまえておく」ことであり、しかもそれらの行動様式の発達が自律的に統御されていく順序と割合とがパースナリティの形成に重要な意味をもつことになると考えている。すなわち、子どもが自分の意志と選択とで、両面価値をもつ諸機能を統御しようと試みるとき、それに成功すれば、自己と自分の能力とに自信をもつことができる。一方、もしその試みに度々失敗したり、或はあまりにも敵しいしつけが行なわれて、それを試みることさえ許されなかつたりすると、子どもの自分の身体は無能であり、外界に対してあまりにも無力であると感じる。そして退行するか、或は偽りの前進をして満足と支配とを求めざるを得なくなる。こうして指しゃぶりがはげしくなり、泣き虫に

なる。或は敵意に満ちた、侵入的、攻撃的態度をとるようになるのである。

この観点から排泄のしつけをもう一度考えてみよう。排便をコントロールする括約筋は、普通、一歳半から二歳にならないと成熟しない。このことは括約筋が十分に発達するまでは、子どもは排泄の統御ができないことを意味する。だから、子どもの身体的レディネスがととのうのを待って、排泄のしつけを始めるならば、この課題は、子どもの誇りと達成感の源泉となりうる。子どもは両親に非常に重要と思われているこの課題を自分がやりとげたことをとくにうれしく思い、ますます自分で統御しようという意欲を強めるであろう。また、この成功によって、自分の行動を自己制御できるといふ自信も生まれてくるのである。ところが、逆に身体的成熟がなされる前に親が敵しい排泄のしつけを始めた、或は放任主義から排泄のしつけが不適切であったりすると、子どもは社会の要請にこたえる適切な対処の仕方を学ぶことができず（たとえば粗相というような事態に遭遇して）、その結果、失敗感や無能感におそわれるのである。このように、排泄のしつけは個人の自律性と、社会の同調への要請との間に葛藤を引き起こすことになりやすい。いうまでもなく、自律性の概念はもっと広範な行動をも包含する。この時期は、いろいろな行動領域にお

いて技能が発達する時期であり、排泄の統御はそれらの技能発達における一つの課題にすぎない。子どもがさまざまな技能を獲得する過程において、自分の内的要求と社会との間の葛藤を克服して、成功の経験を重ねることが、子どもの自律感や有能感を発達させることに結びつくのである。

したがって、エリクソンは、この段階の発達課題は自律性の感覚の獲得であると主張する。その自律感を発達させるには、まず初期の信頼の念がしっかりと培われ、それが保証され、継続することが必要であるとする。なぜなら、この年齢の子どもは、自己と他人との区別がわかりはじめ、未熟な方法ながら強烈に自己を主張するようになる。いわゆる「強情の時期」を迎える。子どもは強引に専有するか、頑固に排出するかを自分で自由に決めたいと思うこの突然の激しい衝動におそわれるときでさえ、自己に対する基本的信頼や世界に対する信頼が崩れることはないのだという確信に支えられていなければならないからである。しかし、この発達段階も終り頃になると、自分で適切に統御できる技能の種類は多くなり、子どもはそれらの獲得に大きな誇りを感じるようになる。こうして、自分一人でしごとがうまくできるたびに、子どもはものごとを適切に統御でき、欲求を満たすことができる者として自分のことを考えることができるようになり、子どもの

自律感が育っていくのである。

とはいうものの、子どもを取り巻く環境の中で現実的な問題として彼が統御できるものは限られており、失敗することも多い。

しかも、失敗を親が厳しく叱ったりすることもある。そのような場合、子どもはきまり悪い思いや、愚かにも自分を白日のもとにさらけ出してしまったという感情にとらわれやすい。これをエリクソンは恥の感覚と呼んでいる。それは、自分が見られる準備ができていないのに完全にさらしものにされているという意識、或は誰かに非難の目で見られていると意識する疎外状態のことと考えられている。また、子どもは自己の価値や、自分の世話をしてくれる人々の信念の堅さや洞察力に対して疑惑感を抱くこともある。その上、親への依存要求も強いこの時期の子どもは、親の不同意の表現に対してきわめて敏感である。それゆえ、失敗をした後で厳しい罰や恥を味わうことは、不安や葛藤を引き起こす原因にはなっても、子どもに不適切な行動についての内的認識を高め、反省をうながすことにはならない場合が多い。

またこの恥の経験は、きわめて不快なものであるため、子どもはそれを回避しようとして、新しい活動に手を染めることにまったく消極的になることもある。このような子どもが快を感じるこ  
とができるのは、失敗をする危険がもっとも小さい熟知した状況

においてのみであり、したがって新しい技能を習得する機会も少ない上に、成功感も小さいので、なかなか自信がもてず、いつまでも疑惑だけが持続することになる。或は、耐えきれないほど恥ずかしい思いを経験した子どもは、正当な恐れや恥を感じるかわりに、むやみに反抗したくなるような気分におちいつたり、人に見られてさえないなければ、何でもやってしまうというひそかな気持を抱く場合もある。

このように、エリックソンは第二の精神発達段階において、自尊心を失っていない自己統御の感覚から永続的な自尊の感覚が生まれ、筋肉と肛門との無能感や、自己統御の喪失感や、両親から過剰に統制されているという感覚などから永続的な疑惑と恥の感覚が生まれることを重要視している。そして子どもにとって自律対恥および疑惑が第二の核心的葛藤であり、それを解決することが自我の基本的課題であると考えている。この課題を果たす過程において、多くの子どもはいくつかの失敗を必ず経験する。またどんなに寛容な親でも、失敗した子どもに恥を感じさせてしまうこともある。実は、このような適度な失敗の経験を通して、子どもは外界についての現実的な認識をもつことができ、また自己像と技能とについてより現実的な評価を下すことができるようになるのである。また、この時期の危機を克服して自律性を獲得した子

どもでも、時には自分にうまくできるだろうかと自己の能力に疑惑をもつこともあるが、普通は、それでも「意志」の力でいろいろな活動に向っていくのである。それに比べて、恥と疑惑の感覚をより多くもつようになった子どもは、新しい活動に挑戦することを避け、きわめて受動的、消極的になる。したがって、親や養育者は、子どもが恥や疑惑で圧倒されてしまうことのないように、まず子どもの要求や感情の変化に敏感でなければならぬであろう。そして子どもの「自分の足で立ちたい」願望を支え、励ましてやらなければならない。とはいっても、子どもの自律の要求の中には、そのままでは社会に通用しない要求や、親の良識や善意に逆らう要求もある。そのような場合、親は忍耐強く教え、子どもが子どもなりに考えてこれを受入れるまで待つことができなくてはならない。まして、子どもの能力以上のことを親が期待しすぎることによって、子どもに度々失敗を経験させ、恥ずかしい思いをさせてはならないのである。したがって、能力感を伸ばすために、新しいことや、時には子どもにできそうにないようなことをやらせてみる場合には、失敗したとしても叱るのではなく、勇気づけてやるといふ親の態度が不可欠となるのである。

ところで、この自律性をうながすもう一つの重要な要因は、子ども自身のエネルギーと頑固さである。子どもは自分一人でする

のが好きというだけでなく、どうしてもそうすると言ひ張る。その頑固さにわれをればしばしば驚かされるほどである。エリクソンはこれを第二の徳目「意志の力」として問題にしている。すなわち、この時期に、括約筋ばかりでなく、他の筋肉も使うことができるようになるが、子どもは、さらにそれらを「意志の力」で使うことを学ばねばならないと言っている。一層積極的に活動するチャンスをつかもうとするとき、自己統御と他者からの統御という二重の要請に直面することになる。つまり急速に芽生えてくる自分の意志と、他者の意志との衝突を経験するのである。しかしこの場合、エリクソンによれば、意志をもつということは強引に自分の思いを通すことではなく、自分に「できる」ことを「意志する」つまり自分の衝動を生かす判断力と決断力とを次第に増大させていくことであるという。それは、何を意志することが可能であるかを見分ける力であるといってもよい。

勿論、ここで問題にされているのは、意志力の基礎のことである。本當の意味の意志力は成熟した人間だけがもつものである。しかし意志の根は、他の人格的特性と同様に学びとられるものである。それは、一見関連が薄いと思われる自我の諸経験の中で、たとえば意識化や言語、身体動作などを統合する過程の中で学びとられる。この意味で、たとえば排泄のしつけは、身体要求

と外的統御の調節を子どもが意志的に確立する努力の中心となる。そして、子どもはたとえしつけの過多や過少から深い恥の感覚や強迫的な自己への疑惑を体験したとしても、意志力が自我発達の初期に確実に育っているならば、「希望」の場合と向じように「意志の力」を維持することができるのである。なぜなら、成長していく子どもは、次第に何を人に期待してよいのか、何が自分に人から期待されているのかについて知識を積み重ねていくからである。そして、たとえ自分の期待に反し、打ちのめされる経験をしなければならぬとしても、或は自分で成功しないことが心のどこかでわかっていたとしても、それをやらざるを得ないこととして受け入れることを学んでいるからである。

意志力が小さいと、人は新しい問題に直面した場合、すぐにそれを投げ出してしまふか、或はそれを自分の成長の糧として、または自分にとって興味ある問題として積極的に取組むかわりに、それを自分の関係のない非現実の空事にしてしまふ。したがって意志力とは、たとえ幼児期において避けられない恥や疑惑の体験をもちつつも、自分を統御し、自分で自由な選択をしようとする不慮の決意であるともいわれている。

また、エリクソンは「善意」を意志力の社会的問題をあらわす言葉としてとらえている。善意とは、意志をお互いにある程度制

限することの上に成り立つものである。幼児が仲間として新しい友だちを受入れることを学びはじめるのは、この二、三歳の時期になつてからである。ピアジェの言葉を借りれば、この時期の子どもの思考はきわめて自己中心的である。したがつて、人は他者と共存して生きるものであること、そのために自分を抑えなければならぬときもあることなどを、その場その時に即して親は子どもに教えなければならぬ。そればかりではない。親は、幼児の強さをほめ、励ましながら、同時に一方では、弱者には弱者としての権利があること、またそれを擁護することを教えなければならぬ。その場合、それができるのは、法の精神を体得した親自身の公正な態度であると、エリクソンは強調している、この親の態度が、次第に子どもにとって自己統御の尺度となり、子どもはわがままを自制し、他人の立場を思いやり、親切心を示し、善意を与えることを学んでいくのである。

さて、先にも触れたように、この時期に、親や養育者は、彼らの価値観に基づいて、また社会規範やそれぞれの家庭生活で許される条件にそつて、子どもの行動を方向づけ、教え、制限する努力を開始する。いわゆるしつけを始める。もとより、しつけとは、子どものもつさまざまな要求や衝動を、親や養育者の価値観や要求でもつて抑えつけてしまうことではない。何でも親のいい

つけ通りに行動する子どもに育てることがしつけのねらいではない。子どもが何かをやりたいという衝動にかられたときに、社会的に承認されるような適切な方法でそれを満たすよう自分を律することができる人間に育てることである。つまり、現実社会への自律した適応をうながすことである。先に言及した排泄のしつけは、子どもの側からの適応と社会の側からの指導との問題であると言いかえることもできる。子どもは親や養育者の指図や制限を自分なりに考えて自分の中に取り入れ、自分で自分を律し、指図するようにならなければならないのである。そのときに必要となるのが、どんないやなことでもがまんして自分を励ましていく力、つまり強い意志力である。その意志力を育てるには、まず子どもの自己主張、他でもない、この時期の子どもの自律の要求こそ親は大切に伸ばしてやらなければならないのである。してみると、エリクソンが強調する自律感の獲得と意志力の育成とは、この時期の子どもの教育の核心をついているものであるといえよう。

自律性の発達について、情緒的、知的発達の側面からの考察と、この段階の課題の解決の失敗に起因する情緒障害についての叙述は次回にゆずることにする。